HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道における更新世末期から完新世前半の先史文化
Author(s)	山原, 敏朗
Citation	22-31 新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56122
Type	report
File Information	pt1ch3.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第３章　北海道における更新世末期から完新世前半の先史文化

山原　敏朗

それでは始めさせていただきます。帯広百年記念館で学芸員をしています山原です。よろしくお願いします。私が加藤博文先生の方から話をしてほしいといわれたテーマは、先ほどの安達登先生がいわれたN9bという遺伝子グループの分岐年代のあたりまでの、いいかえれば縄文前期以前の北海道の考古資料の様相と言うことだったと思いますので、概説みたいな形になるとは思いますが、その辺のことをしゃべらせていただきたいと思います。

先ほどの安達先生の方にもちらっと縄文人じゃなくて縄文時代人というような表現もあったんですけれども、北海道、特に東の方から言うと、縄文時代という表現はいいとしても縄文文化というふうに一括されると、具体的に何をもって縄文文化と言えばいいのかというのを悩むことがある地域でもあります。同心円状に広がるようなイメージで考古文化を理解しようとすると、その周縁とされる地域においては必然的に生じる問題なのかなとも思います。

最初のスライドは、対象とする範囲のトピック的な遺物が出てくる年代と気候変動のグラフを組み合わせたもので、まずはこれに沿って簡単に説明させていただきたいと思います。

今、北海道で分かっている一番古い人工遺物というのが、小型で定形化が乏しいような感じの石器を組成する一群です。年代値が出されているものが非常に少なくて、しかも非較正で２万4,000年～２万6,000年前か、それより古いという程度の精度のものです。ここでは較正年代でだいたい３万年前くらいとしましたが、この数値は、似たような時期のものを参考にして、だいたいこのぐらいだろうと想定した程度のものなので、そんなに正確じゃない。大ざっぱにこのくらいという形でとらえていただければと思います。これより古い確実な例は、今のところ報告されていないと思います。

次に石刃の出現を示しました。石刃はかつて新人とその前のヒトの違いを考古資料から見る上での、１つの指標になっていました。石刃というのは、こういう縦に細長く剥ぎ取られた石片で、少なくとも日本の場合、それらが意図的に製作されているという状況があることを前提にして理解されます。最近では人類の解剖学的な変化と石刃の出現とはかみ合わないという話になっていますけれども、考古資料としては依然重要視されています。ここでは、川西Ｃ遺跡の資料を取り上げました。大ざっぱな較正年代では２万4,500～２万5,000年前くらいです。石刃を伴うという意味ではもっと遡ると思われる資料が他にあるのですが、信頼性のある年代値が出ていないので、川西Ｃ遺跡を出させていただきました。

先ほど細石刃という話が安達先生の方から出ていましたけれども、それが最初に北海道で出てくるのが較正しないでだいたい 2 万年前、較正するとだいたい 2 万 3,000 ～ 2 万 4,000 年前ぐらいからです。細石刃というのは、簡単にいえば幅が 1cm に満たない小さな石刃のことで、大陸で発見されている資料から、骨などの軸に装着して使われたであろうと推測されてきました。細石刃の製作には、湧別技法といわれる有名な製作方法があるんですけれども、先史人の遺伝子分布の傾向の一部については本州に細石刃文化が南下したことと関連するのではないかという先ほどの話は、この製作方法の広がりについての話です。湧別技法がみられる時期は、北海道の資料でいえば非較正で 1 万 4,000 年前くらい、直すとだいたい 1 万 6,000 年～ 1 万 8,000 年前ぐらいになります。

較正年代で 2 万数千年前より以降、しばらくの間は、細石刃やそれと関連する石器群がずっと続くのですけれども、1 万 4,000 年前くらいになると北海道で初めて土器が出てきます。考古学的にはこの辺りから旧石器時代から縄文時代への移行期になるのですが、実際のところ、これ以降の数千年間は、どのような特徴を持った遺跡や遺物が位置付けられるのかよく分かっていません。年代的な位置づけがある程度分かるようになるのは、だいたい 1 万年前くらいからです。道東ではテンネル式とか暁式とかいいます、簡素な平底の土器がこのあたりから出てきます。それからずっと下って、8,200 年前くらいに急激に寒冷化する期間がちょっとだけあることが知られています。この変化と沿うように石刃鏃文化がトピック的に北海道に現れるのだろうと思っております。

ここからは、先のスライドで取り上げたところの様相を少し詳しく説明します。

まず、確実な例としては北海道で今のところ一番古いだろうと思われる人工遺物の一群なんですけれども、ここでは若葉の森遺跡という帯広市内の遺跡から発見された石器群を取り上げました。だいたい握り拳大か、それよりちょっと小さめの黒曜石の円礫を、こういう棒状のたたき石の先でちょんちょんとたたいて小さな石片が剥ぎ取られています。全部で 1 万点ぐらいの遺物が出ているんですけれども、数のわりには加工された石器が非常に少ない。錐とするか、それとも両側のえぐりの方を使っているとみなすべきかといった石器はあるんですけれども、明確な加工痕が残された石器という意味では 20 点もないと思うんです。加工するという行為に乏しいものが現状では北海道で一番古い資料の特徴と理解されます。

次に示したのは、石刃が道具の主役を占めるようになった頃の資料です。この資料は川西 C という遺跡から出たものでして、ここでは石刃と石刃を加工して作った掻器とか、彫器とかの石器がみられます。ただ、このような資料が出た遺跡の数はまだ少なく、必ずしも十分に内容が分かっているわけではありません。

ここに赤色と黒色の石が集められた写真があります。これらは顔料の原材だろうというふうに考えているものです。擦り痕が残る資料もありまして、石などの固いものにこすり付けていたんだろうと思われます。こういう顔料の原材のようなものが発見された遺跡は本州では非常に少ないのですが、北海道では、これ以降の時期の遺跡からは結構普通に出てくるというんで

すか、出土すること自体はそう珍しくありません。顔料の材料が一般的に組成されるという状況は大陸側でもあるようなので、旧石器時代における北方系の文化的要素の一つと言ってもいいんじゃないかなと思います。

次は旧石器時代後半期の資料です。前半期と後半期というのは押圧剥離で製作される細石刃があるかないかだけで大まかに区分したものです。後半期についても、組成される石器をもとに前半と後半に一応細かく分けています。先ほど取り上げました湧別技法を使った集団が残したものは前半の方に含まれます。

この資料は湧別技法の細石刃を作る前のブランクです。当初はもうちょっと上まであったんですが、この資料は上の部分が抜かれた後のものなので、半月に似た形になっています。細石刃は、上の部分が抜かれた際に生じた面から押圧剥離、押し剥がすようにして作られます。細石刃が押し剥がされた痕跡を残す資料、細石刃核はこちらになります。

北海道の細石刃を組成する資料にはもう１つ大きな特徴がありまして、スライドのこの辺にある黒曜石ではない石材を使った例がそうなんですけれども、一般的に荒屋型彫器といいまして、素材の周りを加工して、それから主に右側から左側に向かって細長い面が作り出されたもので、細長い面の縁辺が刃とみなされる石器です。

荒屋型彫器は、新潟県にある荒屋遺跡の資料をもとに設定された石器の型式です。ただし、そこには石刃を素材とするものが含まれていなかったので、素材は一般的な剥片が用いられると定義されました。そうなると、厳密には石刃素材のものはこの定義からは外れてしまうことになります。けれども、北海道では石刃を素材にしたものも多く出ていますので、素材の種類にかかわらず系統的には同じものとして扱う方が適切であろうと考えられます。私なんかは「周縁加工の左刃彫器」というふうな言葉でいいかえています。北海道の細石刃遺跡では、この石器が細石刃とセットになっていることが一般的なので、本州の細石刃石器群の系統をうかがう上でも重要な石器の一つといえます。この石器は大陸にも通じるものですが、大陸については私よりは加藤先生の方が詳しいと思いますので、詳しくは先生の方に聞いていただければと思います。

後半期の前半は較正するとだいたい２万 3,000 ～２万 4,000 年前から１万 6, 000 年前から１万 8, 000 年前まで、直さないとだいたい２万年前から１万 4, 000 年前ぐらいまでの年代が出ています。

これより新しいだろうと考えられてきた旧石器資料には、有舌尖頭器といわれる、槍のような形で基部が舌状に作り出された石器や、斧形の石器が組成されるようになります。また、彫器などの石器の特徴や細石刃の製作方法も少し変わってきます。こうした資料が本州でいう縄文時代の草創期ぐらいに当たるだろうというふうに見なされてきたと思います。

先ほどの質疑応答ですでに少ししゃべられてしまいましたが、湧別技法という細石刃製作の方法は北に目を向ければ確かに北海道を介在するルートで本州に入ってくるということが想定されるのですが、最近では韓半島の南の方までやってきていることが分かってきましたので、

必ずしも北に目を向けておけばよいという訳にはいかなくなってきました。しかも、こうした資料には湧別技法が用いられたことを示す資料だけじゃなくて、荒屋型といえそうな彫器もセットになって出ているようです。このようなセットを持つ例は､岡山あたりまでありますけれども、大陸からサハリン北海道を通って東日本まで南下するルートとは別に、韓半島から渡ってくるルートも踏まえつつ議論していく必要も生じてきたのではないかと思います。

安達先生の話とも関連するので、湧別技法が伴う石器群について、ちょっとだけ細かくいいますと、北海道のこの種の石器群と、東北のそれとがまったく同じかというと、必ずしもそうではなくて、微妙な違いもみうけられます。その違いの一つが先ほどから取り上げています荒屋型彫器で、北海道の資料を見て、東北の北部の資料を見て、東北の南部のそれを見るというふうにしていくと、明瞭な線引きができる訳ではないんですけれども、その形や作り方が少しずつ変わっているという様相がうかがえます。

どういうことかといいますと、北海道の場合、彫器の下の部分、基部の形には、円い形や、少し膨らみをもって尖る形のものが比較的多く見受けられます。また、表面と裏面の両方を平面的に薄く剥ぎとるような作り方になっているものが多く、結果として、基部だけがバイフェイス、槍形の両面調整の石器のような作りになっています。こういうものが北海道の湧別技法に関する資料に伴う彫器には特徴的にみられます。

これは青森の大平山元遺跡の彫器なんですけど、これを見るとほとんど北海道の例と変わらない。だから、この辺は北海道と同じとみなして私はいいと思うんですけど、一方で山形県の角二山遺跡とか、新潟県の荒屋遺跡の資料をみると、先ほどのような平坦に剥離する方法で作られた例が影を潜め、ブランティングといわれる方法の結果とされる加工痕、加工面が急傾斜するものばかりが目につきます。その間にある岩手とか秋田、このあたりの地域では、量的にまとまって出土した遺跡がほとんどなく、今ひとつはっきりいえないことも確かですが、北海道でこの石器群の彫器に特徴的とした例が散見されますので、この種の彫器からみると、ぼんやりとした境が東北の北あたりにあるようにも考えられなくはない。少なくとも、湧別技法で作られた細石刃に伴う荒屋型彫器、周縁加工の左刃彫器という石器の顔つきは、山形それから新潟、福島あたりの資料と比べた場合、北海道とは多少なりとも変わってきているというところまでは言えるかなとは思っています。

したがって、そういう現象も踏まえての議論でなければ、現状では湧別技法の分布がそのまま北の集団自体の南下を直接的に表しているとはいいきれないように思います。

その後、草創期になるとどういうふうになるかということなんですが、ここでは国学院大学の谷口康浩さんたちが作られた、青森の草創期の考古資料と出土層位の関係を表した図を引用させていただきました。草創期とされている時期にはまず、御子柴・長者久保文化というふうにいわれています、こういう立派な斧、それから大きな木の葉形の尖頭器が組成される考古文化があります。これには無文土器も加わります。年代は、測定値に幅がありますが、古く出た

値の方を採ると１万 6,000 年前、個人的には数値がまとまっている１万 5,000 年前ぐらいだろうと思っています。

次に、粘土紐を貼り付けたような文様、隆起線文土器というのが出てきます。その後、爪の形をした文様、それから縄を器面に押し付けた、押圧縄文という土器が出て、普通の縄を転がす土器が出てきます。草創期という区分の中での細分は、おおむねこういうふうに分けられていると思うんですけれども、この頃の北海道がどういう様相だったかというと、御子柴・長者久保文化ないしはこの隆起線文の土器の文化があった時期ぐらいに、石斧や有舌尖頭器というような石器が組成される後半期後半の旧石器の一群があったんだろうと考えられています。

それで、最近出てきた大正３遺跡の爪形文土器というのが、非較正でおおむね１万 2,000 年前、δ 13 の値がちょっと大きいので、若干、古く出ているのかなという気もしますが、較正するとだいたい１万 4,000 年前あたりになっています。本州で縄文草創期とされる考古文化がみられる頃、北海道では依然旧石器的な文化が続いていただろうと想定されていたところに本州的な土器文化があることが明らかとなったということで、重要な発見となりました。ただ、問題としては、このような古い土器が出たからといって、今までの旧石器とされてきた資料が全部これより古くなるかいうことになると、ちょっと考える必要があるかなと思います。もしかしたら、旧石器といっている資料に同じ時期やそれより新しいものが含まれているという可能性もあります。旧石器文化の終わりの方の資料というのは、北海道では旧石器時代の大半を占めているんですけれども、信頼性のある年代測定試料となりうる有機物を伴う遺跡というのが非常に少ない。そこが研究上のネックになっているというふうに思っております。いい遺跡に当たれば、ぜひ、年代測定をたくさんやっていただきたいというのが今の希望です。

石器の作り方から言うと、最近、草創期の頃の本州と北海道の石器製作の系統は違うだろうという話もあります。というのは北海道の有舌尖頭器の方は、一般的に左上り・右下がりに押し剥がされた痕が残されていると思うんですけれども、本州の有舌尖頭器は右上がり・左下がりになっており、北海道のものとは逆になっています。このような押し剥がされた方向の違い、有舌尖頭器の製作行為の違いは、それぞれの地域集団の石器製作者の系統が違うからではないか、そういう意見が出されています。要するに、更新世末期の北海道の石器製作者と本州の石器製作者は、異なる文化系統にあったということです。これに沿えば、大正３遺跡の草創期の土器と一緒に出た石器も本州系の石器製作の癖がうかがえることになります。土器についても本州系と理解していいでしょうから、大正３遺跡の考古資料は土器にしても石器にしても北海道からみると南の系統になるのかなと思われます。なお、大正３遺跡の資料以降、完新世最初の土器が出てくるまでの 3,000 年間ぐらいは、考古資料の発見に乏しいというか、どのような資料が位置付けられるのか未解明のままになっています。

考古資料が安定的に確認されるようになるのは、八千代 A 遺跡や東陽１遺跡など非較正年代で 8,300-8,000 年前くらいに位置付けられる遺跡からのもので、道東で出てくるこの頃の土器はテンネル・暁式土器群といわれています。ただ、最近ではそれよりも古い、非較正年代で 9,000

年前くらいの考古資料もみられるようになりました。土器の型式でいえば暁式土器のバリエーションとして理解されるものですが、完新世の土器としては今のところ道東で一番古いということになると思います。

8,300-8,000 年前くらいというのは、主に北海道の南半分ですが、発見される遺跡数が多くなったり、規模の大きな遺跡が出てくる時期でもあります。道東の方では、これ以降、平底の土器がしばらく続きます。一方、この頃の半島部の土器は、東北の土器とほとんど同じで、底がとがっている土器が利用されています。それが 8,000 年前を下った頃に平底化しますので、北海道の中では地域間の違いがだんだん薄まっていくような流れであったと思われます。

石器にも多少触れておきます。先ほど土器は西と東とで違う様相があることを説明したのですが、石鏃は土器ほどに地域間での違いが少なく、一定の共通性を維持しているかなという感じで、8,000 年前を下ってくると同じ形となります。その後まもなく道東では石刃鏃文化が北の方から入ってきます。その年代は大正遺跡群の事例を参照すると、7,500 年前を大きくは遡らないような時期と推測されます。

縄を転がした土器は、石刃鏃文化が終わった後に出てきます。縄を転がした土器が現れるのは、非較正年代でだいたい 7,000 年前の頃です。これ以降、道東と道南との間で土器や石器からうかがえる地域的な違いはさらに少なくなります。こうした状況は海進がピークになる頃まで続いていたと思われます。

先ほども触れましたが、8,000 年前を少し遡ったくらいから現れる八千代 A 遺跡では、調査された範囲だけで 100 件あまりの竪穴住居が出てきました。この遺跡は川の源流部にあり、湿地に囲まれた低い尾根状の部分に竪穴が作られています。竪穴は調査区域の北側にまで及んでいるようです。こういう密な掘り込み行為をする状況がこの頃に出てくる現象なのですが、一方でこれより以前には今のところ竪穴というものが発見されていません。ですから、こうした土地利用というものがいきなり現れたように見え、それがこの時期の大きな特徴にもなっています。

この時期の石器には、一般的な石鏃もあるんですけれども、加工具に石刃を使っているところが大きな特徴です。ただし、石刃鏃文化の石刃とは作り方が全く違っています。

この図は、サハリンの研究者によって『北海道考古学』という雑誌の第 45 号に最近の発掘調査で発見されたサハリンの考古資料が掲載されており、そこから引用したものです。ちょっと分かりづらいんですけれども、スラヴァナヤ４という遺跡の出土資料の中にホタテ貝の圧痕が付いた土器があります。ホタテ貝の圧痕は土器の底部に付いているんですが、テンネル・暁式土器群というのは、土器の底にホタテ貝の圧痕がみられることが 1 つの特徴と理解されています。このような特徴を持つ平底土器は、これまで道東だけにしか発見されていなかったんですけれども、最近、サハリンでもこういう土器が出てきたというのは注目されます。ただし、こちらの方は非較正の C14 年代で 8,000-7,500 年前とされており、北海道で出土しているものよ

りちょっと新しい。石器も、いわゆる石刃鏃文化のものと同様な方法によって作られているようなので、テンネル式、暁式土器の文化と全く同じものとして扱うのは難しいかもしれません。けれども、北海道独自の特徴とされてきた資料と類似した例がサハリンの完新世の前半期にもあるということが分かっただけでも、これは１つの大きな成果なのかなと思っています。

この報告に掲載された 8,000-7,000 年前の時期の資料の中でもう１つ気になったのは、菱形みたいな形の石鏃らしき石器です。このような形の石鏃は 8,000 年前を下った頃に道内一円にみられますが、もしかしたら、それらと関連するのかなという意味で、興味深い資料と思っています。もうちょっと詳しい情報が出れば面白いかもしれません。

完新世に入ってから出てくる道東の平底土器がどのような系統を引いているのかというのは、実はよく分かっていません。資料的な特徴からみると、北の方の影響かなというふうに思えなくもない。昔からそれを感じさせるような大陸の資料が断片的ながら紹介されていたので、そうじゃないかというふうな考えを持ちやすくなるんですけれども、似たような土器は、実は東北の縄文時代の草創期の終りから早期の初めの頃とされる土器にもあります。現状では系統的な詳細あるいは動態はつかみにくいですが、本州、それから道東、サハリンというふうなつながりというものは、まったくなかった訳ではないんだろうというふうに私は思っています。

北の方の影響ということでは、後続して現れる石刃鏃文化というものがあります。石刃鏃というのは、石刃を矢尻に加工しているという意味ですけれども、他の石器類も含め石刃鏃文化としての特徴をそなえた石器資料自体は、先ほどの湧別技法に関連した細石刃核の分布ほどじゃないにしても、すごく広い分布をしております。中国の東北部からシベリア一帯、島嶼部ではサハリンから北海道の東部にかけてが主要な分布域です。ただ、石刃鏃文化のものといえそうな石刃や鏃といった石器それ自体は、最近は道南でもぽつぽつ見受けられますし、石刃鏃発見地の最南端は今、東北の青森にあります。それでも道東までがこの文化を担った集団の主要な活動域であっただろうと考えるのは、出土遺跡の分布密度の濃さに加え、集落のような遺跡が日高山脈より西では発見されていないからです。

石刃鏃文化の石刃や石刃石器は非常にきれいで、石器作りはかなり洗練されていた行為だったことがうかがえます。しかも同じような方法を用いた石刃製作はアジアの東北部辺りだけじゃなくて、大陸の西側にも広く伝わっていたようにも見受けられます。現れる年代もそう大きくは違っていないように思われます。

石刃鏃文化に組成される土器は、浦幌式といわれる土器のように、それ以前の北海道の土器との系統が考慮されるような土器もあるんですけれども、一方で女満別式といわれるスタンプで押したような文様がみられる土器もみられます。これとよく似た特徴を持つ土器が大陸に分布することは早くから知られていましたので、石器とともに大陸系統であろうというふうに考えられてきました。この他、環状の装飾品なども大陸系統とされています。石刃鏃文化は、全てではないにしても、大陸系の要素が強い文化だというふうには理解できるかと思います。

石刃鏃文化が北海道で展開した年代というのは、非較正の年代で 7,500 - 7,000 年前くらいで

す。較正年代に直すと、8,000年前を少し遡る頃になりますが、ちょうどこの頃に8.2Kイベントとされる短期間ですが、ちょっとした寒冷化が世界的に起こっています。北海道に石刃鏃文化が波及するのはその影響があるんじゃないかなと私は思っています。

この寒冷化が終わると、本格的な温暖化の時期に入ります。いわゆる縄文海進といわれる時期ですが、それが始まる頃にこういう縄を転がした土器、東釧路Ⅱ式といわれる土器が道南、それから道東に出てきます。これに伴う石鏃は、石刃鏃の輪郭とよく似ていますが、両面加工のもので、作り方自体が違っています。

石鏃の形態はこの後、柳葉形に変化し、さらに東釧路Ⅳ式土器が作られる頃になると、最大幅のところが屈曲し五角形のような形になります。東釧路Ⅳ式土器というのは、北海道では一般的に早期の一番終わりの土器とされていますが、この土器型式が作られている最中に器形が平底から尖底または丸底に移り変わります。

縄文時代に作られた特徴的な石器の一つに、携帯用のナイフと想定されている石匙という石器があります。北海道ではつまみ付きナイフという名称の方が一般的ですけれど、この頃の石匙は片面加工で、断面が不等辺三角形をしています。東北の方では松原型石匙といわれていますが、似たような石器が東北から北海道にかけて現れるということです。断面が三角形の礫を用いて面だけでなく稜を使っているすり石なんかも、これよりやや下るくらいの頃までの東日本の遺跡ではよくみられますが、北海道でも同じ状況といえます。

要するに、7000年前を下った頃になると、大陸的な要素はほとんど見えなくなり、本州と共通する要素で占められるということです。前期の綱文式土器がつくられた年代は非較正でだいたい6,000年前もしくはそれを若干下るくらいです。東釧路Ⅱ式土器がだいたい7,000年前ぐらいなので、今の話はこの1,000年あまりのことになるかと思います。

以上のことを踏まえて、北海道、とくに東部の方からの視点でいいますと、一方の系統がずっと続いているというよりは、北の方や南の方の要素もあれば、北海道独自の要素も一緒に含まれている場合もあって、特に更新世の末期や完新世なると、全部が北からであるとか、全部が南から来た文化であるとかというようなイメージではなくて、自然史的、歴史的な要因が複雑に絡み合って地域独特の展開があったという感じです。北海道で縄文時代とされる期間の中で最も大陸的な色合いの濃いのは明らかに石刃鏃文化ですが、それでさえ大陸のものとまったく同じ特徴を持った資料だけで構成されている訳ではないので、この文化を残した集団は北から到来した人々だけで構成されていたと単純に考えるだけでは、何か釈然としないところがある。もう少し複雑な事情があるように思います。

したがって、現状でいえば、ある考古文化の系統を、集団の系統と直接に、または単純に結びつけて話すのは、そう簡単にできることではない。質の高い資料を用いた綿密な分析と広い視野からの議論を積み重ねない限り、考古文化的な結びつきが相対的にどの辺りと強いか、弱いかといった程度のことしか言えないんじゃないかなと思っています。

以上です。どうもありがとうございました。

参考文献

山原敏朗　2008 「更新世末期の北海道と完新世初頭の北海道東部」『縄文化の構造変動』六一書房

山原敏朗・寺崎康史　2010 「旧石器文化の編年と地域性」『講座 日本の考古学』1: 旧石器時代（上）青木書店

長沼孝・越田賢一郎　2011 「考古学から見た北海道」『新版 北海道の歴史』上　古代・中世・近世編 北海道新聞社